

教室の中への教育改革

東京都台東区立大正小学校長 石橋 久司

低学年の教室では、こどもたちが、間違えても間違えても、「はい！はい！」と、何度でも何度でも体乗り出して、先生や友達の問題に答えようとして一生懸命です。それが、学年が進むにつれて、この活発さが見られなくなります。頭の中で、心の中で、間違えてはいけないと、答えを吟味しているのかも知れません。より適切な表現を求めて時間をかけているのかも知れません。

それが、先生の意に添えるように腐心していたり、学ぶ意欲が減退していたりするためだとしたら、学校はこどもたちを伸ばすことから逆行した教育活動を行っていることとなります。学校はこどもたちを確実にだめにしていきます。

これまでの学校に見られた姿でもあり、大いに反省させられます。

もちろん、これまで多くの実践者が様々な教育活動を通して多くの教育効果を上げてきたことも事実です。

昭和30年代後半、A区の研修で、幼稚園・小学校の関連が課題となりました。その席で、幼稚園の先生方が、「園児が修了して半年、かつての園児は机に向かって姿勢正しく椅子に座り、先生の指図どおりに、『はい。』と時間割の中で学習しています。こどもたちの変容に関心もしますが、それでいいのかなと思えてなりません。」と発言しましたが、その言葉が長いことわたしの心をとらえてきました。

平成元年に示された移行措置によって、低学年の生活科を目指した指導が現場で始まりました。

教室にとどまらず、さまざまな場所に学習の場が広がり、こどもたちが実生き生きと活動する姿が目止まるようになりました。当時、本校の教頭であったわたしには、今回、本校で取り組んだ、「総合学習」の導入は、すでに、その時に始まっていたのではと思えます。

中教審の答申で、「学校は教育の基調を転換し、『生きる力』を育成するという基本的な観点を重

視した学校に変わる必要がある」と示されたとおり、教師自らが教育の基調を転換できるよう意識改革を図る必要があります。

私自身のこれまでの研修を振り返ったとき、机上で理論を学んで、計画を練ってと、時間ばかりをかけてきたことが反省されます。それはそれでとても大切ですが、本校の今回の研修は実践的に学ぶこととし、授業研究も教師の願いと（こどもをどのように変容させてあげたいのか、こどもにどうなって欲しいのか—案外これが乏しいことが気にかかります）、こどもの学びたい思いの大枠から走りだしました。その過程で講師の話を伺い、資料をいただきながら、教師の意識改革を図りました。

幸い、平成5年に、区内3校目のインテリジェントスクールとして落成した校舎には、多目的スペースがあり、さまざまなTT指導、学級を外した教育活動を行ってきた経緯があって、先生方もフレキシブルな思考が可能になっていました。

全個教連でお世話になっている教師が複数いたこともあって、情報が入手しやすく、奈須 正裕先生にも多くのご指導をいただきながら教師の実践的研究は深まりをみせています。

「先ず実験」と、「こどもたちと共に新しい学習をつくりあげる実践」の研究を重ねていますが、横断的学習、クロスカリキュラム等の整理を見ないまま進んできています。教課審から新しい指導要領が示された今、これまでの成果をまとめ、「本校の特色ある教育活動」を示すカリキュラム作りが急がれます。

これまで、教育改革が教室の前で止まっていると言われました。今回の教育改革は確実に教室の中へ歩み始めています。全個教連のご指導をいただきながら、こどもたちがより質の高い「総合学習」を展開するよう、教師の確かな支援体制を整えていきたいものと考えています。

全国個性化教育研究連盟 第14回夏季研修会
「総合学習をどう実践するか」

〔期日〕平成10年7月28日(火)・29日(水)

〔会場〕東京 上智大学7号館/台東区立大正小学校

今回の夏季研修会は、具体的にどのように総合学習を実践していけばよいのか等について、以下の日程で理論面・実践面の両面から迫ろうと研究・研修が行われてた。

〔日程〕

第1日目 7月28日(火)

◎開会行事

◎講演会

○講演①

「総合学習をどう実践するか」

愛知県大府中学校教頭 成田 幸夫先生

○講演②

「総合学習とカリキュラム編成」

国立教育研究所室長 高浦 勝義先生

◎実践報告

①小学校A

「生きる」

愛知県・緒川小学校 齋田 俊行先生

②小学校B

「みのりの秋、みつけた！」(4年)

埼玉県・高砂小学校 多田 信夫先生

③中学校

「トピック学習から自己解決力へ！」

福島県・岩江中学校 佐藤 祐也先生

◎質疑及び研究協議・まとめ

第2日目 7月29日(水)

◎講演

「総合学習の評価」

上智大学教授

加藤 幸次先生

◎提案

「カリキュラム評価」

東京学芸大学助教授

浅沼 茂先生

神奈川県国府小学校

池田伊三郎先生

千葉県阿蘇中学校

松田 光弘先生

◎質疑

◎施設見学

台東区立大正小学校

◎Q & Aコーナー

東京・埼玉・千葉・神奈川・東海・関西

・九州

◎講演①

「総合学習をどう実践するか」

愛知県・大府中学校教頭 成田 幸夫先生
淡々と話される成田先生の講演であったが、同じ中学校の教師として、励まされる内容であった。特に、「中学校の教師も、価値ある学びに飢えている」という言葉や、「教師の意識を変えるためには、まず歩き出すことだ」という励ましが、心に残った。講演の概要は、以下の通りである。

「総合学習」という言葉が先行している感があるが、中学校では、入試を意識しすぎて教科の課題に過敏であるとか、部活、生徒指導等々で忙しすぎて研究をする暇もないというように、「総合学習」を立ち上げるには難しそうな状況がある。

しかし、きっかけさえあれば、むしろ小学校より中学校の方がなんとかなるということが、両方の経験をしての感想である。「総合学習」を立ち上げることは、今までの「教育観」の見直しを迫られることであり、学校そのものの変革をすることである。

実際に「総合学習」へのきっかけとしては、学校行事や校則の見直し、学校生活の創造などが考えられる。

「学校・学年行事」、「文化祭や20周年記念行事」など、その学校で特色のあるものを生かして、「総合学習」を立ち上げることも考えられる。

「総合学習」を計画する時に忘れてはならないことは、「総合においては、その主題そのも



○研究協議

(司会)千葉県打瀬小学校 三浦 信宏先生
(助言)上智大学教授 加藤 幸次先生
国立教育研究所室長 高浦 勝義先生

三校の実践報告に基づき、質疑応答、情報交換及び指導助言等で研究協議が進められた。

主な質問や意見は、総合学習の時間のとり方や内容、テーマ設定の仕方であった。小学校の実践報告校からは、子どもに何をしたいかをなげかけ、話し合いでテーマをしぼりこむこと、中学校実践報告校からは、子ども側から学習活を組んだり、選択性の高い学習活動を作ったりするとの説明があった。

助言者からは、次のような助言をいただいた。「課題は、どこから生じてくるか」「単元の源泉」については、問題場面をどうしこむか、どういう風に課題として転換するかということであり、子どもの生活や経験をベースに組むことが大切である。また、「問題づくり」においては、問題が出てくる根拠を考える必要がある。

これらについては、具体的な実践例を示された助言であったので、大変わかりやすかった。



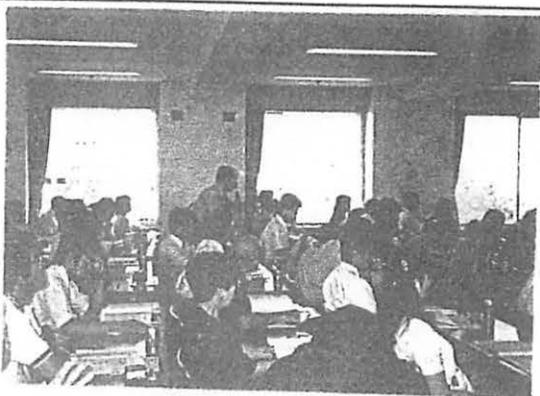
次に「教師の在り方」についてであるが、総合学習における引っ張り具合は、子どもに即してとなる。総合は一人立ちであり、教科は学習の仕方を学ぶ。即ち、教科と総合の役割がある。

さらに大切なことは、子どもが問題解決をし、教師はそれを支援をする。つまり、教師は子どもと共同の問題解決者になることである。

最後に、実践を通しての三校の先生方の感想が述べられた。それらは、実践をして楽しさを実感したこと、学校の柱になるものからカリキュラムを作成すること、保護者や教師の意識を変えること等である。

1時間半の協議会であったが、司会者の総合はロマンを持ち、苦しい先の楽しさを抱いていくとよいでしょうという言葉で会を閉じた。

(原崎 佑子・東京)



◆第2日目

○講演

「総合学習の評価」

上智大学教授 加藤 幸次先生

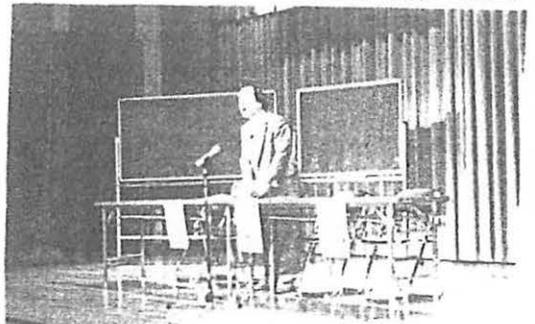
これまでの教科学習では、自ら課題を見いだすプロセスが欠落していた。総合学習では子ども達が課題をとらえて、これを追究する能力を育てたい。そのためには学習課題を追究する過程を重視した評価が必要である。

課題追究の過程で子ども達に、メタ認知を育成することが重要である。メタ認知とは、問題解決を目指して活動している自分の姿をより高い次元から眺め、修正を迫る認知行為である。メタ認知をすることが自分の学習活動を自己評価することにつながるのである。

学習のプロセスを重視した評価として、総合学習にふさわしい評価活動として発展してきた「ポートフォリオ評価」がある。ここでは、学習活動の足跡が分かるように情報が収集され、ファイルされる。その足跡をもとに、子どもが自分の学習活動を振り返り、自己評価を行い、評価活動に参加するのが特徴である。

評価活動は、子どもによる、子どものための評価でありたい。そのための具体的な評価の方策をさらに検討していくが必要である。

(山口 真吾・埼玉)



○提案

「カリキュラム評価について」

東京学芸大学助教授 浅沼 茂先生
神奈川県国府小学校 池田伊三郎先生



池田先生の質問に浅沼先生が答えるという形式で、パネルディスカッションが進められた。池田先生は実践の面から、総合の内容を吟味することも評価にはいるのか、総合の評価の方法や目標との関わり、子どもの行動を具体的に評価できるか、といったことなどを話題に出した。

対して浅沼先生からは、多くの評価はカリキュラム評価を含む。評価方法については、教師が観察しポートフォリオから教師が判断する方法があるということ。また、子どもの探求の道筋を探ることの重要性を説かれた。

緒川小学校の卒業生を対象にした追跡調査のテレビ視聴の後、フロアからも質問が出された。中学校教師からの質問として、通知票のあるべき姿、総合での評価の必要性などが出された。浅沼先生からは、それに対して総合の評価は従来のやり方を踏襲しないこと、また、目標を立て、どう行動していき、どうなったかという形でしか総合は評価できないものであり、目標そのものの視点がカリキュラム評価には必要だと答えられた。

子どものとらえが、総合の評価において一番の要であることを感じた。

(中田 泰志・埼玉)

(事務局への問い合わせ・連絡先)

〒115-0044東京都北区赤羽南1-16-2-504
03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

○施設見学

「大正小学校」

大正小学校校長 石橋 久司先生

大正小学校は、名前のとおり大正5年に創立された歴史のある学校である。平成6年に新校舎となると同時にインテリジェントスクールとして新たなスタートをきった。幼稚園を併設し職員室と管理室以外はすべて社会教育に開放される。そのため、全館冷暖房完備である。

各教室はゆったりとしたオープン・スペースを持ち、家具や備品などもよく整備されていた。郷土資料館や廊下の展示物、各教室の間に設置された図書コーナーからは、児童の主體的な学習活動を保障しようというポリシーが感じられた。

最上階の5階にある大正ドームは屋根が可動式になっており、夏はプールとして、その他の季節は遊び場として利用されている。

このように近代的な校舎ではあるが、至る所に旧校舎の面影を残したアーチ型のデザインが施され、廊下には4代目の学校長が収集された日本画や旧校舎の材料で作られたレリーフが飾られていた。新しいものと古きよきものが見事に調和した施設であった。(藤巻 稔・山梨)

○Q & A コーナー

参加された先生方の総合学習への取り組み等への疑問も個人差があるだろうと考え、今回は、個々へのサービスということで、地域別にコーナーを設け、そこで先生方の質問を受ける機会を設定した。

総合に対するディメンションの話など、経験に基づく貴重な話し合いの場となった。



全国個性化教育研究連盟会報 第48号

平成10年9月26日発行

編集責任者 事務局長 高浦 勝義
編集 広報部 太田 始